

常照

第874号

清風宝樹しょうふうほうじゅをふくときは

いつつの音声おんじょういだしつつ

宮商和きゅうしょうわして自然じねんなり

清浄勲しょうじょうくんを礼らいすべし

親鸞聖人作 浄土和讃

わかりかりやすく伝えたい

親鸞聖人は晩年、漢文の経文や論書を分かりやすく人々に伝えるために、七五調の和文でお念仏の教えを著しました。これを『和讃』といい、和語をもつて釈尊の教えを讃嘆するという内容は、日本文学史においても、親鸞聖人の文学的才能とお人柄が偲ばれる傑作であります。

今回紹介する和讃の内容は、「清らかな風が、浄土莊嚴のあらわれである、こんもりと茂った宝樹を吹くと、宝樹は五つの音色が出る。その中でも宮と商の音が自然に妙たえなる和音を奏でている。香氣すらもこもる清浄なる音楽を

奏でたもう阿弥陀如来を敬い尊びなさい。」というもので、釈尊が説かれた仏説無量寿経上巻の一節を聖人が採り上げられました。極楽浄土の素晴らしさを人々に伝えたいという思いが、音楽的な知識によって表現されています。

五つの音声

おんじょう

中国の伝統的な音楽で用いられる音は五つあり、それを五声ごせいといっています。五声を西洋音楽に当てはめると宮きやう(ド)、商しょう(レ)、角かく(ミ)、徵ち(ソ)、羽う(ラ)となります。ピアノやギター等を弾かれる方はご存知かと思いますが、ドミソの和音はCコードと称し、ごく一般的な和音です。しかしながら、ドとレを同時に弾

くと、実際にはこれらの音の組み合わせは存在するものの、不協和音的な響きとなってしまいます。

宮(ド)と商(レ)の和音、これを音楽の専門家、それも東洋と西洋の立場から見れば様々な論議がなされますが、そういうことを取り立てて述べる次元を超えた自然な音楽なのです。つまり、人間の知識では計り知れない、「極楽浄土の音楽」ということになりました。

報恩講のお斎

とき

話はかわりますが、法要の時にお寺で頂く食事を「お斎とき」といいます。

お斎は時代の流れで変化もしてきま

したが、殺生を戒める仏教の教えに従い、肉や魚を使わない精進料理が基本です。もちろん野菜などの植物にも「命」があります。命の恵みに感謝をするとともに「他の命をいただいて生かされている自分」を忘れてはなりません。以前はご門徒の皆様がお米や野菜、お味噌など色々な食材を持ち寄り、協力をして調理し、皆で食卓を囲みました。そしてお食事を頂きながらお念仏に出逢う慶びを語り合い、阿弥陀如来の教えに出逢う聞法の間として大切にされておりました。

また宗祖親鸞聖人のご恩を報謝する法会を「報恩講」といいます。もちろん報恩講でもお齋を頂きます。ある地方で供される煮物の盛り付けを見てみ

ると、一番上に椎茸がのっていて、その下に牛蒡と山芋、人参が盛り付けられ、一番底に三角形の油揚げが敷かれています。実は、これらの五つの食材は、親鸞聖人が関東に念仏布教された頃のお姿を表しているそうです。椎茸は聖人が被^つっていらした笠、牛蒡は冬の凍土に衝^ついた杖、山芋は、寒風に吹きさらされた夜に、枕の代わりにして眠られた道端の石を表しています。人参は、聖人の手足のアカギレの血を、そして油揚げは袈裟^{けさ}を現しているそうです。このようにして、五つの食材を通して「聖人のご苦勞」を偲ぶのです。

五つの譬えを通して

五つの音声、五つの食材、「五」という数字はたまたま偶然ではありますが、私たちの先達^{せんだつ}は五つの譬えを用いて、お念仏の教えと聖人のご苦勞を分かりやすく伝えて下さいました。

時代は変わり、物があふれる世の中になっても、分かりやすく伝えようとする姿勢、物を通して慈しむ心の尊さを大切にしていきたいものです。

昨今の社会は、権利ばかり主張し過ぎる気がしてなりません。「五つの音声」を通して、様々な声(主張)が美しいハーモニー(和す)となるよう、益々お念仏の教えを聴聞していきましょう。

合掌 南無阿弥陀佛

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院

電話 二二一〇七四四番
FAX 二二一四〇八〇番
テレホン法話 二七一一六一六番

如来大悲の恩徳は
身を粉にしても
報ずべし
師主知識の因縁徳も
ほねをくだきても
謝すべし

正像末和讃